

縦割り保育で子どもたちが経験していること : 異年齢間の関わりのエピソードをもとに

著者名(日)	小泉 栄美, 野中 弘敏, 中野 隆司
雑誌名	山梨学院短期大学研究紀要
巻	33
ページ	49-61
発行年	2013
URL	http://id.nii.ac.jp/1188/00000125/

縦割り保育で子どもたちが経験していること

—異年齢間の関わりのエピソードをもとに—

Children's Experience in Vertical Child-Care System :
An Analysis Based on the Episodes between Children of Deferent Age

小泉 栄美*, 野中 弘敏, 中野 隆司

Emi KOIZUMI, Hirotoishi NONAKA and Takashi NAKANO

概要

本研究では、縦割り保育の場で異年齢の子ども間に生じたエピソードをもとに、子どもの内面または関係性において起こっている事象の質的分析、および「学びの評価言語」(佐々木, 2004)による分類を通じて、各年齢に特徴的な経験・育ちへの縦割り保育の意味を検討した。その結果、縦割り保育は相手の立場や気持ちを考えることができる場となり、年上の子どもが年下の子どもを気にかけて自分以外の立場にある人の気持ちを考え行動することで自信を育み、年下の子どもは年上に助けられることで憧れや信頼感を抱き新奇な課題に取り組む動機づけを高める場となり得ることが確認された。縦割り保育の教育的意義として①他者を気にかけて助けようとする、②他者を目標として憧れる、③自ら解決策を考案したり関わりを工夫する、④うまくいかないことや我慢の経験が成長を促す、の4点が示唆された。

1. 研究の目的

アメリカの作家フルガムは、『人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ』の中で次のように述べている。

「人生の知恵は大学院という山のとっぺんにあるのではなく、日曜学校の砂場に埋まっていたのである。わたしはそこで何を学んだらうか。／何でもみんなで分け合うこと。／ずるをしないこと。／人をぶたないこと。／使ったものはかならずもとのところに戻すこと。／ちらかしたら自分で片付けをすること。／人の物に手を出さないこと。／誰かを傷つけたら、ごめんなさい、と言うこと。(後略)」(フルガム, 1996)。

人生に必要な知恵の「すべて」を幼稚園で学ぶと語られるほど、幼児にとって、幼稚園や保育所が人間関係の基礎を学ぶための重要な場であるこ

とは間違いない。

最近の発達心理学の研究では、5歳頃までの時期には五感や情緒の発達、自発性が育まれていき、子どもたちが意図的に行った事柄が拘束されたり禁止されたりすると強い罪悪感を持つようになるなど、他の人の考えていることや感じていることを子どもたちがどのように捉えているかについて多くのことが明らかにされている。しかし、3歳の子が本当に何を考えているのか、4歳の子ども、5歳の子どもたちの考え方やものの見方はどのようなものなのかなどについて、まだ明らかになっていないことも多い。

いわゆる「心の育ち」といわれるものが、きょうだい間の関わりを通じていっそう育まれると強調されることもある。しかし、「少子化時代」といわれる今の世の中では、家庭のきょうだいの数も少なくなり、きょうだい果たしている役割

* 山梨学院短期大学専攻科保育専攻

は、昔に比べると、小さくなっているように推測される。このことから、兄弟姉妹がいない子どもに対して、年齢の近い血縁関係の中で培われるような役割取得の機会を保育の場で補償することは、現在の保育現場に求められている重要な機能の一つであるといわれている（荒井・福岡，2003）。擬似的な兄弟姉妹関係を保育活動のなかに取り入れ、情緒的な発達や「おにいちゃん、おねえちゃん」「おとうと、いもうと」「年上、年下」といった役割取得を促すための環境構成が、「縦割り保育」と呼ばれる異年齢混合集団による保育形態である。

縦割り保育は、異年齢児間相互作用による積極的な効果を期待して設定する「理念的異年齢保育」であり、一定の教育的意義があるとされる。先行研究で明らかとなっている教育的意義として、年下の子どもは、年上に憧れや目標を持ち、逆に、上の子どもは年下の子どもに対して優しく対応することを通して自信をつけるといった意義が指摘されている（管田，2008）。しかし、こうした縦割り保育の厳密な定義は保育研究の領域の中で十分なされているとは言い難い（夏堀，2008）。これは、現代の定義の中の「教育的意義」あるいは「相互作用による効果」が指す内容についての議論が不十分であることも要因の一つであると考えられる。つまり、「縦割り保育で何が育つのか」についての議論および実証的研究がいまだ不足しており、異年齢間の相互作用効果に関しては、十分に検証されてきてはいないのである。

そこで本研究では、筆者（小泉）が研修で関わった X 県私立 T 幼稚園で行われている縦割り保育の場面で見られた、異年齢の子どもどうしの関わりにおけるエピソード記述の質的分析をもとに、それぞれの学年の子どもたちが日々どのような経験をしてどのように育っているのか考察することを通じて、縦割り保育の意義について考えていくことを目的とする。

II. 研究の方法

- (1) 期間：2011年4月～2012年3月および2012年8月
- (2) 対象：X 県私立 T 幼稚園に所属する年少児，年中児，年長児

- (3) 内容：i. 私立 T 幼稚園での1年間の「現場研修記録」の中で異年齢の子どもたちの関わりにおけるエピソードを抜粋し、各エピソードの背景に留意しつつ、子どもたちの内面、または子ども間の関係性において起こっていると考えられる事柄を質的に検討した。
ii. 各エピソードを佐々木（2004）による21種類の「学びの評価言語」に振り分け、それぞれの学年がどのような特徴的経験・育ちをしているのか考察を行った。

- (4) 場所：X 県私立 T 幼稚園

(i) X 県私立 T 幼稚園の概要

学校教育法第22条に従うと共に、カトリック精神に基づいて、善良な人格形成と良い生活習慣の基礎作りができるように体系づけられたモンテッソーリ教育法を取り入れ、自主性・協調性・思いやりのある、強くたくましい心身の発達を目標に教育を行なっている。

(ii) モンテッソーリ教育の一つとしての縦割り保育

この園で取り入れているモンテッソーリ教育の一つに縦割り保育が含まれている。一つの教室に年齢差のある子ども（3～6歳）がいることによって、縦社会の仲間とのかかわりを学ぶ。今、少子化の中で兄弟姉妹のいない家庭が多くなっているが、教師が教え込み、しつけるのではなく、縦のつながりの中から、子どもたちなりのルールで何がよくて何が悪いのかを発見し、学習体験していくことが期待されている。

(iii) T 幼稚園の1日

T 幼稚園における典型的な1日の流れは、表1の通りである。

III. 結果と考察

- (1) エピソードごとの背景と考察

(i) 年少児と年中児によるエピソード

エピソード① 年少児を気にかける年中児

4月

年少児 S ちゃん（3歳）は、幼稚園に入ったばかりの頃お母さんと離れ、自分のクラスの中に入ると声を立てて泣き叫んでいる。年中児 K 君（4歳）は、「どうしたの？」と声

表1 T幼稚園の典型的な1日の流れ

時間	1日の流れ	内容
8:20~9:15	登園・着替え・モンテッソーリ活動	・出席カードにシールを貼る。 ・荷物をロッカーに置き、着替えをする。 ・モンテッソーリ活動を始める。
9:15~	片付け	・保育者が一人ひとりのモンテッソーリ活動の進み具合を見てまわり、子どもたちは片付けをする。
9:20~9:40	読み聞かせ(絵本)	・保育者が、月ごとに用意された各学年の3種類の本を読む。 ・子どもたちは学年ごとにまとまって座り読み聞かせを聞く。
9:40~9:50	朝のお集まり	・白線に円になって座る。 ・オルガンの合図に合わせて立ち、賛美歌、お祈りをする。 ・当番が主体となり名前呼びをする。
9:50~11:10	モンテッソーリ活動・学年別活動	・M. モンテッソーリ(1870~1952)が提唱した教育方法を実践。 ・一人ひとりがその日の課題を持ち自分のペースで進めていく。
11:20~	食事の用意	・当番が主体となり食事の用意をする。 ・当番以外の年中・年長児は、ハーモニカの練習をする。
11:50~	昼食	・異年齢ごとの各グループに分かれて食事をとる。
12:30~13:15	自由遊び	・園庭(ホール)で自由に遊ぶ。
13:15~13:30	片付け・着替え・帰りの支度	・遊んだ遊具を片付け部屋に戻る。 ・園服に着替え、帰りの支度をする。 ・白線に円になって座る。
13:30~13:50	帰りのお集まり	・当番が主体となり、配布物を配る。 ・賛美歌を歌い、お祈りをする。 ・さよならの挨拶をする。
13:50~14:20	読み聞かせ(紙芝居)	・各学年ごとまとまって座り、紙芝居の読み聞かせを聞く。
14:20	降園	・バス、お迎え、お預かりとそれぞれ保育者 ・友達と挨拶を交わして降園する。 ・お迎えを待っている間は、絵本を読んで過ごす。

をかけSちゃんの頭をなでたり、手を繋いであげたりする。

K君は、年少児の後半から学年が上がることを楽しみにしており、年中になったことで喜びを感じている。入園したばかりの年少児に対し、「一緒にお着替えしよう」「一緒に遊ぼう」と積極的に、そして普段より、声をかけている姿がみられる。特に泣いてしまうことの多いSちゃんには、「どうしたの?」と話しかけ、頭をなでてあげたり手をつないで目的地まで一緒に行ってあげたりする行動がみられる。困っているのではないか、寂しいのではないかという年少児の気持ちを察し、僕が助けてあげよう、面倒をみてあげようとする意欲が現れ、そのようなことがK君の喜びや自信に繋がっているようである。

一方Sちゃんは、K君の関わりによって徐々に落ち着きを取り戻していく様子がみられる。このことがきっかけとなり、Sちゃんは、K君なら困ったときに助けてくれるという信頼感を持つこ

とができていると考えられる。

エピソード② 年少児の着脱を手伝う年中児 5月

年中児Y君(4歳)は、自分がお世話係である年少児Sちゃん(3歳)に対し「一緒にお着替えしよう」と声をかけ、Sちゃんと同じペースで着替えを行い、園服のボタンを留めてあげようと必死に頑張る姿がみられる。

Y君は、普段、朝や帰りのお集まりでの集団行動から外れて、自分の興味のあることに夢中になってしまったり、先生の話最後まで聞けなかったりと、周りから少し遅れをとりがちである。登園時も、出席カードにシールを貼るまで、シールを貼ってから着脱に移るまでなど、保育者の言葉がけがないとなかなか次の活動へと進むことができない。しかしこの日は、自分が「お世話係」をすることになっているSちゃんと一緒の

時間に登園してきたこともあり、笑顔でSちゃんに声をかけ、Sちゃんと同じペースで着替えを行い、園服のボタンを留めてあげようと必死に頑張るY君の姿がみられる。ここでいう「お世話係」とは、年中児、年長児の子どもたちが、普段から特定の年少児の子に心配りをするよう担当を任されているもので、年中児・年長児の大切な役割の一つである。このエピソードは、自分より年下の子がいることで自分が年上であることを強く意識し、何かをしてあげようという気持ちが芽生え、お世話係をすることに喜びを感じるきっかけとなった場面ではないかと考えられる。この出来事があったから、Y君は、「年少さんが見てるよ」「あ、優しくてカッコイイY君だ!」「さすが年中さん!」という保育者からの言葉がけがあると、自分本意の行動をやめ、しなければならぬ活動にスムーズに移ることができるようになってきた。

一方、SちゃんもY君の行動をよくみて、興味を抱いている姿がうかがわれる。自然とSちゃんが年中、年長に上がった時にY君の姿をモデルとし、お世話係を行うことができるのではないかと考えられる。

エピソード③ 年少児の気持ちを察する年中児 5月

年少児Nちゃん(3歳)は、自由遊びが終わった後、「誰も遊んでくれるお友だちがいなかった」と涙をながしている。そのことが影響したのか、その後の一斉活動の時間にも、クラスの輪の中に入れず教室の片隅に一人で座りこんでしまう。その姿に気付いた年中児のY君(4歳)が「今度は一緒に遊ぼうね」とNちゃんの顔をのぞきこみながら話しかけNちゃんを自分の隣に連れて行き一緒に座る。

Y君は自分が楽しく自由遊びから帰ってきたが、部屋に戻ると涙をながして泣いているNちゃんの姿が目にとまり、「どこか痛いのかな?具合が悪いのかな?誰かに嫌なことをされたのかもしい、お母さんに会いたくなっちゃったのかも?」と筆者にさまざまな「原因」を考えて話し

かけてくる。そして、Nちゃんに「どうしたの?」と声をかけ、誰も遊んでくれる人がいなかったというNちゃんに対し、「今度は一緒に遊ぼう」と声をかける。しかし、一斉活動の時間になっても集まることのできないNちゃんをさらに気にかけ、そばに寄り添いNちゃんの手をひいて自分の隣に連れてくる。ここでY君は、自分だけが楽しければよいのではなく、相手の姿をみて、相手の気持ちを察してそれに見合った援助的行動をとっている。一方、NちゃんはY君の関わりによりクラスの中に入ることができ、安心感を取り戻していると考えられる。

エピソード④ 年少児にお祈りの仕方を教える年中児 9月

年少児T君(3歳)は、帰りのお集まりでのお祈りの時、体をゆらゆらさせ、手を合わさないでいる。それを見た隣の年中児K君(5歳)は、T君の手を取って「こう合わせるんだよ」と教える。保育者が、「K君に教えてもらえて良かったね」とT君に言葉がけをすると、T君もK君も喜びの表情を浮かべる。

この園では、朝、昼、帰りそれぞれにお祈りの時間が設けられており、お祈りの言葉を唱える時や賛美歌を歌っている時はその場で起立し合掌することになっている。

この日のT君は、運動会の練習の後で疲れていたこともあってか、普段より落ち着きがなく、お祈りにも身がはいっていない様子である。保育者が、「疲れているのはみんなも一緒だから頑張ろう」と声をかけてもなかなか集中することができないT君の姿をみた隣のK君が、直にT君の手を取って手を合わせられるように導いた。K君は、T君がしっかりお祈りできるように自分が教えてあげようという気持ちから、言葉ではなく、実際に手を持って教えてあげるという自然な行動を行うことができていると考えられる。

(ii) 年少児と年長児によるエピソード

エピソード⑤ 年少児にお世話を焼く年長児

6月

登園時、制服への着替えの時、お世話係の年長児N君（5歳）が年少児H君（3歳）に対しハンガーに服を通してあげたり、ボタンを留めてあげたり、服の裏表を教えてあげたりなど付きっきりで手を貸してあげる。

お世話係をする年中児、年長児には典型的にみられる光景である。N君は、普段から人前に立つことが好きで、集団の中でリーダー的存在になることが多い。これまでの活動や経験を通して自己効力感を持ち、特に下の学年の子に対して、はりきってお世話をする姿がみられる。この場合も、なかなか着替えが進まない年少児H君の姿をみて、N君は進んで着替えを手伝っている。H君もそのようなN君に親近感や憧れの気持ちを感じているのではないかと考えられる。

一方で、N君にとっては、自分でできることを他者にしてあげる行動から教えてあげる行動へと、そして相手が自発的に行えるようになるという目標があることを理解して見守ることなど、相手の状況を判断した上で行動を選択できるようになっていくことが今後の課題になると考えられる。

エピソード⑥ 年長児の真似をする年少児

7月

粘土・お絵かきの時間、年長児が全色のクレヨンを使いカラフルに線を描いている。その年長児の書いている画用紙をみた年少児のK君（4歳）は、同じように全色のクレヨンを使って画用紙一面にカラフルに線を描く。さらに周りにいた数人の年少児もK君や年長児の真似をしながら同じように描く。

このエピソードからは、周囲への関心や注意力、観察力が伸び、直接的に教えられたわけではないが、周りがしていて面白そう、楽しそうと思ったことを自分の中に取り入れていこうとする年少児の姿がみられる。こうした自発的な模倣的活動を繰り返すことによって、人や物への理解を深めたり社会性を育んだりなど、学習における基礎を作ることができる。また、お互いの学年がイ

メージを共有する場となっていることも見受けられる。

エピソード⑦ 年長児の良いお手本 4月

朝のお集まりの時、ほとんどの子は円形に集まっている。お当番であった年長児R君（5歳）は、モンテッソーリ活動に区切りがつけられずお集まりに来ようとしていない年少児Aちゃん（3歳）をみて、保育者に「先生Aちゃんこないから始められない」と言う。すると保育者は「まだ幼稚園入ってきたばかりだからみんながAちゃんに良いお手本見せてあげよう」と言葉がけをする。R君は、背筋を真っ直ぐ伸ばしお当番の活動を始める。

R君は普段から、保育者の言葉がけをよく聞いており、道理に合わない行動や、ルールから外れている行動をしていると感じた友だちに対して注意をしている姿が多くみられる。今回のお集まりでも全員集まった状態でないと始めてはいけない、という通常のルールを適用しようとして、それがAちゃんの遅れによりまだ始められる状況ではないと保育者に訴える。これには、その日のクラス活動を主体となって進めていくお当番としての役割を果たさなければ、というR君の役割意識の強さが現れている。しかし保育者の言葉がけにより、今はAちゃんを受動的に待つのではなく、自らがモデルとなりAちゃんに行動のしかたを示していこうという、目前の出来事に対する捉え方の転換が起こったのではないかと考えられる。

このエピソード後、Aちゃんも自分が置いていかれたことに気づき、保育者のそばに近寄り「おしまいにする」と話し、保育者の援助を借りながら片付けを始めていた。

エピソード⑧ かけっこで年少児にペースを合わせながら走る年長児 8月

園庭での自由遊びの時間、最初、年長児のR君（5歳）、S君（6歳）、G君（6歳）、Yちゃん（5歳）、Mちゃん（6歳）、Eちゃん（6歳）がかけっこをして遊んでいると、

その楽しそうな様子を羨ましそうにみている年少児のAちゃん(3歳)、Sちゃん(4歳)、H君(4歳)が年長児に「仲間に入りたい」と言う。年長児たちは、夢中になっていた自分たちのかけっこを一旦中断し、年少児と手をつないでペースを合わせて走ったり、走る距離を短くしたりと工夫して年少児とのかけっこを一緒に楽しむ。

このエピソードからは、自分たちよりも小さい年少児の子と、どうしたら一緒に楽しくかけっこをすることができるのかという目的に合わせて、方法を考えることができている年長児の姿が観察できる。一見、自分たちの楽しい時間を邪魔されたくない気持ちが優先されるのではないかと思われるが、自分たちの楽しさだけで満足するのではなく、かけっこの楽しさを年少児とも共有し合っている。子どもたちの中で、学年が違うから入りにくいという気持ちを持つことなく、学年の隔たりなく自然に多様な場面で遊びが展開されるのは、縦割り保育の構造がもたらす特徴の一つであろう。

エピソード⑨ 年長児と年少児による片付けでのトラブル 9月

お片づけの時間になり年長児のY君(5歳)と年少児のT君(4歳)が一緒に使っていた遊具をどちらが片付けるかで取り合っている。保育者は、「Y君年長さんなんだから、T君に『どうする?』って聞いてみたら?」と言葉がけする。さらに、片付けの場所まで半分に距離を区切って1人ずつ片付けられるように保育者が提案すると2人は納得し、T君、Y君という順番で遊具を片付ける。

このエピソードからは、Y君、T君共に自分の思うようにならない事態を経験していることが分かる。保育者が年長児であるY君に、解決の道をT君に提案していけるように働きかけたことにより、自分の主張を一步譲って年少児と協力したり、意見を調整したりしながらお互いの合意を得ていくY君の姿が観察された。またY君に

とって、主張のぶつかり合いやけんかの場面は、年長児である自分が率先して解決策を考えようという気持ちを持つことのできる機会ともなりうる。これらの経験や日々の園生活を通して、自分だけではなくお互いが納得のいく理由で物事を判断していく力がそれぞれの学年につくと考えられる。

エピソード⑩ 年長児の巧みな言葉がけ 9月

年少児Hちゃん(3歳)は、昼食時に出たパンの中に入っているレタスに手をつけられず、レタスだけを引き抜いてランチョンマットの隅に置いていた。筆者が、「少しだけでいいから食べてみよう」「パンと一緒に食べてみたら?」と言葉がけをしていると、年長児Mちゃん(5歳)が「アリさんぐらいでよいから頑張って食べてみたら?こんぐらい、こんぐらい」と手で表現しながらHちゃんに話しかける。すると、Hちゃんは、小さくレタスをちぎり、口に運ぶ。そして私やMちゃんに「食べたよ」と笑顔で満足げにほほ笑みかける。

MちゃんとHちゃんは、昼食を食べる班が一緒である。Mちゃんは、普段から、苦手な食べ物が多いHちゃんに気を配り、昼食時は声をかけ励ましている。この日もレタスに手をつけられずにいたHちゃんに、Mちゃんは「アリさんぐらいでよいから」とまるで保育者のような言葉がけでHちゃんがレタスを食べられるように導く。Hちゃんは、アリさんぐらいの大きさにレタスを小さくちぎることに楽しさを感じている。Mちゃんの言葉により、苦手なレタスを苦痛な気持ちではなく、楽しい気持ちで挑戦することができたエピソードであると考えられる。

エピソード⑪ 読み聞かせでの責めぎあい 11月

年少児は、読み聞かせの時間にアンパンマンの紙芝居がでるととても喜ぶ反面、年長児はアンパンマンが嫌いだという子が多く「アンパンマン嫌だ、恐竜の紙芝居がよいー」

「アンパンマンきもいー」という声が飛び交う。また反対に、恐竜、怪獣の紙芝居が出る
と年少児は「見たくない」「怖い」と目をふ
さいでしまう。

縦割り保育における読み聞かせでは、保育者がそれぞれの学年の興味・関心に合わせたものを選び、各学年がバランスよく楽しめるように配慮している。学年ごとに好きな紙芝居が定着してきているが、その傾向は異なっており、時に本エピソードのようなせめぎ合いもみられる。

このような場合、保育者は自分が好きなものや大切なものを友だちから、嫌だ、きもいと言われたらどう思うかを問いかけ、お互いが好きなものを一緒に楽しめる心、優しい気持ちをクラス全員がもって読み聞かせの時間がどの学年の子どもにとっても楽しく充実した時間となるよう配慮した言葉がけをしている。子どもは、このようなトラブルを経験することにより、自分が言われて嫌なことは友だちにも言わないように気をつけることができ、友だちや他学年の好きなものをお互いに受け入れることができる。そして同じ時間を全員が心地よく共有することができるように子どもたち自身が考えていける機会となる。

エピソード⑫ 園生活でのマナーを年少児に教える年長児 6月

食後のお祈りをする時、まだ絵本を読んでいる年少児に対し、年長児は、長い針が7になったからお祈りの時間であることを伝え、全員がしっかりお祈りのできる姿勢になっているか全体をみわたしている。

幼稚園の最高学年である年長児が園生活でのマナーを年少児に教えている姿はよく見受けられる。このエピソードからは「お祈りの時間だよ」という言葉だけではなく、「長い針が7になったからお祈りの時間だよ」と年少児が分かるような具体的な説明を入れて伝えている。年少児の姿を普段からよくみており、年少児に分かる言葉とそうでない言葉の判断を年長児が持つことができている。より伝わりやすい言葉がなんであるか年長児が理解し自然と発することのできている場面で

あると捉えられる。

エピソード⑬ 年少児の良い見本 1月

帰りの読み聞かせの時間、年長児 A 君（5歳）、R 君（6歳）、G 君（6歳）は、午後の自由遊びでの会話がまだ3人の中で続いていたらしく、保育者が紙芝居を読み始めると、紙芝居に集中できず、3人でクスクスと笑いあっている。保育者は、「年少さんは、こんなに静かにお話聞けるから年長さんみたいだね。交換する？」と言葉がけをする。年長児3人は、保育者の問いかげに首を横に振り紙芝居を聞く。

年長児 A 君、R 君、G 君は、普段からとても仲が良く一緒にいることが多い。この日も帰りの読み聞かせの時間に3人並んで座っていた。

多くの場合は、下の学年が上の学年をモデルとし、上の学年は下の学年のモデルとなるように示していくことが望ましいが、時折このようなケースがみられる。年少児ができて年長児ができない、ということを示されることは、年長児にとって「僕たちの方が本当はできるはずだ」という自尊感情を奮い起こす場となったり、自分たちの姿を振り返り年少児から良い所を学ぶ機会となったりする。これらは、縦割り保育だからこそみられる年長児への刺激であると考えられる。

エピソード⑭ 年少児に解決の道を差し伸べる年長児 12月

朝の読み聞かせの時間、年少児の S ちゃん（4歳）、A ちゃん（4歳）、M ちゃん（3歳）は座る席を取りあっている。保育者は、絵本を読むのを待ち、「この後、シスター先生からのお話があるけど、このまま喧嘩していると年少さんはお話聞けないかな？」と言葉がけをする。すると、年長児 G 君（6歳）が、「今日は、S ちゃんと A ちゃんが先に座っていたから、M ちゃんは、我慢して端に座って、明日は、また交代して座れば？」と提案する。

読み聞かせの時に座る場所は、年少児が1列目、年中児が2列目、年長児が3列目と決まっているが、学年内での並び方は自由である。この日に限らず、年少児は座る場所を取り合うことが多く、時には手が出てしまうことがある。この日もSちゃん、Aちゃん、Mちゃんは激しく席を取り合っていた。保育者から言葉がけがあつてから、年長児G君、その他数名の年長児は、このままだと絵本を読む時間が少なくなってしまう、と感じたようで、年少児に対してこうしたらよいのではないか、という解決案をいくつか提示する。

このように、異年齢の集団だからこそ、下の学年のトラブルに対し、解決の道を差し出したり仲介役となったりなど、保育者をモデルとした関わりを年長児が行うことができると考えられる。

エピソード⑮ 年長児に対する年少児の指摘 8月

この日のお弁当給食の中にエビフライが入っており、机で囲んだ中央の場所にはエビフライのしっぽを捨てる入れ物が用意されていた。年長児Rちゃん（5歳）がエビフライを食べ終わり入れ物の中に入れたシっぽをみて、年少児T君（3歳）は、「まだ食べれる」とつぶやく。

Rちゃんは、エビフライが嫌いなわけではないが、少し身を残したまま、しっぽを捨ててしまった。T君から、「まだ食べれる」と指摘を受け、Rちゃんは、少し恥ずかしそうな表情を浮かべながら、捨てたシっぽをもう一度手に持ち、残っていた身を食べた。

年少児が年長児の行動をよくみて、「あれ？」と思ったことを言葉にし、それを年長児が、恥ずかしそうに食べるというこの場面から、年少児が年長児に、通常とは逆の立場となつて、生活上の指摘やアドバイスをすることにより、自分は下の学年からみられている立場であることに気付くことができたり、自分の行動を改めなおす機会となつたりする。

(iii) 年中児と年長児によるエピソード

エピソード⑯ モンテッソーリ活動での年長児に対する憧れ 1月

年長児のK君（6歳）は、モンテッソーリ活動の時間、1から順にマスに数字を書いていくお仕事をしている。100まで数字を書くことができ、喜びと達成感に満ち溢れた表情で保育者の所に持っていくと、保育者に「100の次は何か分かるかな？」と問いかけられ、100以上の数へも挑戦する。お仕事の終わりの時間になり120まで数字を書けたK君の周りには、同じ学年の年長児の他、年中児の何人かも集まり「わーすごい！」と声を漏らしながら覗きこむ。

モンテッソーリ活動は、学年が上がるにつれてより高度なお仕事を選ぶことができ、選択の幅が広がる。今回の場合は数字をマスに書いていくという活動を選んだK君が、120まで数字を書くことができたことにより、自信に繋がった他、周りの子どもにも「自分もK君のようにがんばろう！」という向上心を与えることができていると考えられる。100までの数字が書けるといことは周囲の子どもたちにとって、憧れの対象となり得るほどの「偉業」である。さらに、100以上の数は子どもたちにとって遠く未知の存在でもある。それができたK君の周りには人だかりができ、年中児の中には「年長さんはこんなことができるんだ」と思ったり「自分も年長さんになったら書けるかな？」と期待を抱いたりする子も出てくる。同じ学年の子に対しては、自分も挑戦しようとする動機づけ効果をもたらしている。

エピソード⑰ 年中児に平仮名の読み方を教える年長児 4月

朝のお集まりでのお名前呼びの時間、その日の当番だった年中児のIちゃん（4歳）は、まだ、平仮名を読むのに時間がかかったり読めない字があつたりしてスムーズに名前を読んでいくことができない。同じお当番でIちゃんの隣にいた年長児のN君（5歳）は小声でIちゃんに読み方を教えてあげてい

る。

お当番活動は、年長児・年中児・年少児が各一人ずつ日替わりで回ってくるようになっていく。朝のお集まりでのお名前呼びでは、クラス全員の名前が書いた持ち札をめくりながらクラスの友だちの名前を1人ずつ呼んでいくのだが、Iちゃんは、まだ年中になったばかりで平仮名を読むことに慣れておらず、読めない字で止まってしまうなどの困難がある。しかしここでは、隣にいた年長児のN君が読み方を教えてあげる姿が観察された。こういった縦割り保育での当番活動によって、それぞれの学年にあった仕事を任せられ、それぞれをお互いがカバーしあいながら異年齢間で同じ課題を達成していく協力関係が養われていると考えられる。

エピソード⑱ 年中児と年長児の言い争い

11月

年中児Y君（5歳）は、お昼の時の机の位置がいつもと違っていったことに気付いて直していると、年長児Rちゃん（6歳）が、「そこに机を置くと狭いから今日はここでよいの」とY君に話す。しかし、Y君はいつもと違うことに納得いかず、「ちがう！こっち！」と声を立てて騒ぎ出してしまふ。Rちゃんも、自分の言い分がY君に伝わらないことに苛立ちを覚えてY君に「だから今日はここでよいの」と大きな声を出してしまふが伝わらず、諦めたように、Y君が机をいつも通り直しているのを黙ってみている。

この日はたまたま、Y君とRちゃんたちのお昼を食べる机の近くに子どもたちの配布物を置いた机があり、いつもと同じ場所に机を配置するとスペースが狭くなってしまうため、子どもたちの机が反対側に置いてあった。しかしY君は、いつもと同じ所に机が無いことに納得いかず、机を持って移動しようとしていた。そこでRちゃんは、その場所に置いてある理由をY君に話す。Y君はなかなか理解できず騒ぎ出してしまふ。それに対してRちゃんも、大きな声でY君に怒鳴ってしまうが、それでも自分の思いが伝わらな

かったため、このまま言い合っても状況は変わらずお昼を食べることができないと判断をし、自分の主張をぶつけることを我慢しY君と距離を置くことができていると考えられる。

エピソード⑲ 年長児の指摘による年中児の気付き 6月

大好きな人の絵を書く時間、最初は、それぞれ思い思いにお父さん、お母さんの絵を描いていた年中児H君（6歳）とB君（5歳）であったが、絵が完成に近づいてきた頃、「家のお母さんはいつも怒っているから角をつけよう」と頭に角を書き始め、B君は「僕はお父さんに涙をつけよう」と目から涙を流す。その様子をみた年長児Mちゃん（6歳）、Yちゃん（6歳）は「そんな風書いたらお父さんやお母さん喜ばないよ？」「そんな絵、貰ったら本当にお父さん泣いちゃうよ？」「もう一度書き直した方がよいよ」と交互に言い合う。そんな年長児の言葉を聞いたH君とB君は、困った顔をする。

大好きな人の絵を描く活動中、保育者が職員室へと用事を済ませに行っていた時に起こったエピソードである。H君とB君は、お母さん、お父さんの絵を楽しく描いていたが、楽しさがエスカレートして、角や涙を書いてしまった。MちゃんとYちゃんの「その絵をもらった人の気持ちを考えた方がよい」という意味を含んだ指摘により、自分たちの描いた絵をながめ我にかえたように深刻な顔になっている年中児2人の姿が見受けられた。保育者が戻ってくると2人は自ら自分たちのやってしまったことを話しに行き新しい用紙を買っていた。

年長児のMちゃんとYちゃんは、年中児2人の行動が、後で絵をもらった相手の「いやだろうな」「悲しいだろうな」という気持ちを引き起こすであろうことに思いを至らせており、絵を買った立場の人の気持ちに気付くように言葉をかけることができている。保育者がその場になくても、このような保育者をモデルとした関わりを年長児が行うことで、年中児は、自らの行動が決してよい行動ではなかったことに気付き、なぜよく

ないのか考え反省することができていると考えられる。

(iv) 年少児とその他の学年によるエピソード

エピソード⑳ ジャンパーを運ぶ年少児 2月

帰りのお集まりの時、廊下のフックに掛かっているジャンパーを取りに来ていない人の分を年少児が確認し両手いっぱいジャンパーを抱きかかえ部屋に持ってくる。

保育者から「年少児さん、みんなのジャンパー持ってきてくれる？」と頼まれたことがきっかけであり、その時に多くの友だちから感謝された経験から人の役に立てる喜びや嬉しさを感じ、その後も自分たちの習慣として毎日ジャンパーを抱えて持ってくる年少児である。年長児や年中児だけではなく、年少児もクラスのために役に立つことをして、みんなから感謝されることへの喜びの気持ちを持ち、やり甲斐を感じながら仕事を行っていると考えられる。また、日頃から保育者や上の学年の友だちがクラスのために活動している姿をみて学んでいることが可視化されたエピソードであるとも考えられる。

エピソード㉑ ハーモニカへの憧れを抱く年少児 10月

年少児 Hちゃん(4歳)、Aちゃん(4歳)は、年中児、年長児が保育者とハーモニカ練習を行っているオルガンのそばに集まり、一緒にメロディーを歌ったり、手拍子をとったりする。また、「はやくハーモニカやりたいなあ」とつぶやいたり、練習している年中児・年長児に「難しい？」と聞いたりする。

毎日お昼前の時間を使い、年中児・年長児はハーモニカを持って保育者のオルガンに集まる。保育者がある日によって1人ずつ、2人ずつ、など人数を指定し、子どもたちは、その人数で保育者にハーモニカを聞いてもらう。保育者は年中児・年長児それぞれの段階にあった曲や季節にあった曲を毎月用意している。オルガンでメロ

ディーを取り、階名を歌いながら子どもたちに合わせてオルガンを弾き、それぞれに応じてアドバイスをする。終わった後に保育者は、その日の達成度を点数の形で伝えるが、子どもたちはその点数を毎日聞くのを楽しみにしている。毎日ハーモニカの練習の時間になると年少児の Hちゃんと Aちゃんは年中児、年長児の練習する姿をみに集まってくる。そして楽しそうに練習する姿をみて歌ったり手をたたいたりする。また、週に1回、年中児・年長児のハーモニカ発表会があり、それぞれの学年が全員並び、クラスの仲間の前で練習している曲を発表する。その姿をみて、年少児はハーモニカを吹く年長児・年中児の姿により一層憧れの気持ちを抱き、「自分も年中さんになったらできるんだ」「はやくやりたいな」という思いから生活上のさまざまな活動への意欲も高められていくことが考えられる。また年中児・年長児も、年少児からみられていることにより「よいところをみせなくちゃ！」という思いからハーモニカへの取り組みの意欲も向上させていることが推測される。

エピソード㉒ 全学年で楽しむ、八百屋さんの手遊び 2月

八百屋さんの手遊びで年少児の R君(3歳)が、前に立ち品物の名前を言おうとしているが、なかなか出てこない。しかし、年中児・年長児は、「にんじんもあるよ」「きゅうりは？」などと R君に水を向けるかのような言葉がけをし、R君が言葉を発するまで待つ。

手遊びの時間を子どもたちはとても楽しみにしており、特にゲーム式で楽しめる「八百屋さん」の手遊びはお気に入りである。この日も年少児から年長児まで多くの子どもが手を挙げていた。年少児は、勢い良く手を挙げるが、実際に前に立つと言葉が出てくるまでに時間がかかり、思うように発言することができないことが多い。この日もそのような様子の R君に対し、年中児・年長児は、せかす様子もなく一緒に品物を考えながら R君を応援するような関わりがみられる。年少児は、日々年上の友だちからの眼差しによって自己

表2 「学びの評価言語」21種類の 카테고리名 (佐々木, 2004)

A	自分の思うようにならないことを経験する
B	必要な時に人に助けを求める
C	他者が「いや」という行為や事柄に関心をもつ
D	自分がされて嫌なことは、そのことを態度や言葉で表現する
E	嫌なことを受け流したり、距離をおいて付き合ったりする
F	自分と異なる行動や意見に対して考えるゆとりをもつ
G	他者の行為や言葉に関心をもつ
H	他者の思い入れや、思い入れのあるものに気付く
I	他者の言い分に真剣に耳を傾けて聴く
J	感情を込めた言葉や論理的な言葉で伝えたり説明したりする
K	他者の行為の意味について想像力を働かせる
L	友達の遊びや活動に入ったり、友達を誘ったり、受け入れたりする
M	遊びの中でやりたいことをしたり、なりたいたい自分を表現したりする
N	イメージを共有したり役割分担をしようとする
O	自分の気持ちや行動、他者からの評価などの変化に気付いたり関心をもったりする
P	自分や他者の良さに気付いたり、それを生かしたりする
Q	自分と違うところをもつ人に憧れる
R	友達や他者に共感したり応援したり、励ましたりする
S	仲間のトラブルに介入したり、関係を調整したりする
T	緊張した場面をユーモアで和ませたり解決したりする
U	問題に対して創造的に解決しようとする

肯定感を相互に支えあいながら、園生活を送っていることが見受けられる。

(2) 「学びの評価言語」による分類

以上のエピソードを、佐々木(2004)による「学びの評価言語」の21種類の 카테고리 (表2) を手がかりに分類したところ、表3のような結果になった。その際、観察をして見受けられた印象も分類の参考とした。

なお、表3の中の○はエピソード内で年下の子どものみが経験していること、△は年上の子どものみが経験していること、◎は両学年が経験していることを示す。

表3から、以下のことが考えられる。

第1に、G. 他者の行為や言葉に関心をもつは、どの学年においても多くみられる。このことから、縦割り保育によって、相手の立場や気持ちを考えることができる場が多くあり、それぞれの学年を意識しクラスのみならずお互いの良い所を吸収しあって生活していることがいえるのではないかと。

第2に、F. 自分と異なる行動や意見に対して考えるゆとりをもつ H. 他者の思い入れや、思い入れのあるものに気付く J. 感情を込めた言

葉や論理的な言葉で伝えたり説明したりする

K. 他者の行為の意味について想像力を働かせる

R. 友だちや他者に共感したり応援したり、励ましたりする U. 問題に対して創造的に解決しようとするは、年中児・年長児に多い。これらのことから、縦割り保育は、上の学年の子どもが、下の学年の子どもを気にかけ、自分がしっかりしなければという気持ちを芽生えさせやすい環境を与えていると考えられる。また、自分より下の学年の子どもがいることが刺激となり、トラブルなどの場面でも率先して自分以外の立場にある人の気持ちを考えて行動できるようになる。さらに、こうしたことが自分への自信に繋がっているとも考えられる。

第3に、B. 必要なときに人に助けを求める

P. 自分や他者のよさに気付いたり、それを生かしたりする Q. 自分と違うところを持つ人に憧れるは、年少児・年中児に多い。これらのことから、縦割り保育の場で、下の学年の子どもは、初めての集団生活を上の学年の子どもに助けられることにより、上の学年に対する憧れの気持ちや信頼の気持ちを持ち、年上の子をモデルとして新奇な課題に取り組む動機づけを高めると考えられる。

表3 「学びの評価言語」によるエピソードの分類結果

		「学びの評価言語」																					
		A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	
エピソード	年少・年中	①		○			△	△	△	△	△	△	△						△	△		△	
		②		○				◎	○							◎	○	○	△				
		③	○	○	△	○		△	◎	◎	◎	△	△	△			◎			△	△	△	△
		④						△	◎	◎							◎	◎		△			△
	年少・年長	⑤		○				◎	◎								△	◎	○	△			
		⑥						○					◎	◎	◎	◎	○	○					
		⑦	△					△	◎	◎	△	△	△			◎	○						
		⑧						△	◎	△	△	△	△	◎	◎	◎	△	○	○	△			△
		⑨	◎		◎	◎		△	◎	△	◎	△	△			△	◎						△
		⑩						△	△	△	○	△	△							△	△	△	△
		⑪	◎		◎	◎		◎	◎	◎	◎						◎						
		⑫							◎			△											
		⑬							◎	△	△						◎	○					
		⑭	○		△	○		△	△		○	△	△				○				△		△
		⑮						○	◎	△			△				△						
	年中・年長	⑯						◎				◎		△	△	△	◎	○					
		⑰		○				△	△			△					○	○	△				
		⑱	◎		△	◎	△	△	◎	△	△	△	△				△						
		⑲			△			△	◎	◎	○	△	△				○				△		△
	年少・他	⑳						◎	◎			△		○		○	◎						
		㉑						○	◎	△				○		△	○	○					
		㉒						◎	△	△	△	△		△	○	△	○			△		△	△

Ⅳ. 総合考察

縦割り保育の中で、各学年がどのような経験をしながら日々育っているのかについて、各エピソードについての考察と、「学びの評価言語」による分類により、以下のことが改めて確認された。

年少児は、初めての集団生活を先生他、年上の友だちに支えられより安心して生活していた。また、誰かに頼る時にどんな言葉を使ったらよいかといったコミュニケーション能力を習得することができたり、信頼の気持ちを持つことができていた。

年中児は、下の学年をお世話する喜びを感じると共に積極的に物事に取り組むようになり自立への第一歩を踏み出す時期であることが推測された。上の学年に対する憧れを強く抱き、時には下の学年からも刺激を受けながら生活する様子がみられた。

年長児は、今までの園生活で得た自信から積極的に年下の子の面倒を見、困った時に援助を行うことができるなど、人の役に立てる喜びを日々感

じながら生活していた。また、時にはまるで保育者のような関わりを行いクラスをまとめていくなど、責任感のある子どもへと育つと共に、人生における縦社会の基盤を築いていく様子がみられた。

全学年を通しては、それぞれの立場を理解することで、お互いを思いやる心、尊重し合う心が育つと共に、トラブルや我慢することなども経験しながら、柔軟な人間関係が築かれていることが観察された。

また、縦割り保育の意義を語る各エピソードから、ア. 他者を気にかけて助けようとする（エピソード①②③⑤⑬⑮⑲⑳㉑㉒）、イ. 他者を目標とする、憧れる（エピソード⑥⑬⑮⑲）、ウ. 自ら解決策を考案する、工夫した関わりをする（エピソード④⑧⑩⑫⑭⑱）、エ. うまくいかないことや我慢などの経験を通してさまざまな事柄を獲得していく（エピソード⑦⑨⑪⑱）の4つの特徴的育ちがみられることが明らかとなった。このように縦割り保育は、年齢の枠をこえ、子どもどうしが認め合える関係、また尊重しあったり、思いやったりいたわったりできる関係が築かれると共に、子

どもたちが自分たちで考えたり学びあうことができる力が獲得できる場であるといえる。

現代は、家庭での兄弟関係が減少していることや、日本での教育は、保育園から高等学校までをみても横割りが多くを占めていることから、同年代の人間関係しか築けなくなっているケースがみられる。しかし縦割りでの人間関係を経験せずに社会に出た時、人間関係の築きの難しさに立ち向かわなければならぬ時が必ずくると考えられる。その時に、幼児期に縦割り保育を経験した子どもたちは、他者への関わり方に困惑することなく年齢の枠を越えて多くの人と関わり協力することができるのではないかと考える。このように、幼児期での縦割りでの人間関係が、子どもたちの将来に必ず生かされていくと信じたい。

引用・参考文献

- 荒井冽・福岡貞子（編著）（2003）．異年齢児の保育カリキュラム—たてわり保育の指導計画と実践例 ぴかりのくに
- 管田貴子（2008）．異年齢保育の教育的意義と保育者の援助に関する研究 弘前大学教育学部紀要，No.100，67-73.
- 子安増生・服部敬子・郷式徹（2000）．幼児が「心」に出会うとき—発達心理学から見た縦割り保育 有斐閣選書
- 佐々木宏子・鳴門教育大学学校教育学部附属幼稚園（2004）．なめらかな幼小の連携教育—その実践とモデルカリキュラム チャイルド本社
- 夏堀陸（2008）．縦割り保育活動に期待される学習効果 富士常葉大学研究紀要，No. 8，78-89.
- 山内紀幸（2007）．「学びの評価言語」試論：「保育実践指導案ジャーゴン」の解体 磯部裕子・山内紀幸 ナラティブとしての保育学 萌文書林 pp. 223-249.
- フルガム R. 池 央耿（訳）（1996）．人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ 河出書房新社

付記

本論文は、平成24年度大学評価・学位授与機構提出論文に加筆・修正を行ったものである。